魔法少女リリカルなのはA's ～偽りの魔導士～

アーチャー【狼】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ' ｓ　～偽りの魔導士～

【Ｎコード】
Ｎ５４２０Ｙ

【作者名】
アーチャー【狼】

【あらすじ】
それは、どこにでもいるような少年が死んでからのお話。
彼は神様を名乗る人に出会い、新しい人生をもらって”ある世界”で二度目の生を受けた。
始まりは最悪。でも、そのあとはまあまあ平和な毎日。
ある世界、それはーーーーー少年の元の世界では、”魔法少女リリ

カルなのは”と呼ばれた作品と酷似した世界。

平凡な日常を望んだ少年はしかし、物語の狂った歯車によって物語へ交わることを余儀なくされる。

異物を織り交ぜた物語は、果たしてどのような末路をたどるのか……

【魔法少女リリカルなのはA' s～偽りの魔導士～】

始まります。

※作者はダメ野郎ですが、よければ付き合ってあげて下さい。ｂｙセイバー

※気に食わないところがあるかもしれんが、あまり作者をいじめてくれるなよ。打たれ弱いのでな。ｂｙアーチャー

プロローグ「始まりは、厄介ごとから」（前書き）

狼「はいはいはい！ついに始めてしまいました本作品！司会は作者こと狼（ろう）が務めさせて頂きます！」

アーチャー「一度君は痛い目を見たほうがいい。」

狼「……それでは、いきなりですが頑張って読んでやって下さいね！」

アーチャー「……私からは一言だ。ついてこれるか？」

ＧＯ！

プロローグ「始まりは、厄介ごとから」

それは、ある日突然全てを失った少年のお話。

少年は神様と出会い、そして、出会いと別れの物語の世界へ旅立つ。

そこは、”魔法”が存在する世界。

新しい人生を神様からもらった少年は、平和な時間を過ごしていた。
新しい人生の始まりこそ最悪のものだったが。

そうして、平和な時の中で生きていた少年はーーーーある日を境に、物語へ介入する……

異物を織り交ぜた、もう一つの物語。

【魔法少女リリカルなのはA' s～偽りの魔導士～】

始まります。

◆

◆

◆

◆

◆

◆

◆

プロローグ「始まりは、厄介ごとから」

◆

◆

◆

◆

◆

目を覚ます。
視界に入るのは、いつもの見慣れた自室の天井だ。
どこぞの決戦兵器のパイロットが言ったような知らない天井じゃない。

「……」

寝転がっているベットの中で、二度寝しようかと思案する。
時計を見れば、時刻は７：３０。
学校が始まるのが８：２０なので、そこまで寝坊というわけでもない。
というのだが……そこで気づく。

「そういや、今日は日曜日だな……」

カレンダーを見れば、今日の日付の上には日曜日の表示。
つまりのところ、お休みだ。

「怠い……」

そんな事を呟きながら、起き上がりベットからでてカーテンを開ける。
途端に差し込んでくる朝日。光に目をしかめながら、ふとこんな事を思った。

ーーーーー今日は、厄介事に巻き込まれなけりゃいいな。

昔から、こんな事を思った日にはよく面倒な事に巻き込まれた。

「流石に、もうないだろうな……」

俺は、死ぬ前、この世界にくる前の世界での思い出にひたりながら部屋からでた。

そうして俺ーーーーー桐谷　蓮の一日が始まった。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ蓮

自分以外誰もいない部屋。

俺は、その部屋の一角にあるリビングキッチンで朝食を作っていた。

服装は、黒を基調としたジーンズに黒いシャツだ。

ちなみに、朝食の調理は背が届かないので台をおいて手を届かせてやる。

言い忘れていたが、俺は小学三年生だ。

ちょっと訳ありな義母をもつ。

ちなみに、俺自身も訳ありだ。まあその事はおいおい話すとして……

「ふぅ……」

朝食は炊いておいたご飯をよそって、インスタントの味噌汁に、ソーセージを炒めたっていう簡素なもの。

まあ、食わないよりはマシだろ？

・

・

・　・　・
朝食を食べ終えた俺は、適当に荷物を持って散歩に出かけた。
俺の住んでいるのは、日本某所に位置する街ーーーー海鳴市。
名前の通り海に面している街で、それなりに活気のいい街だ。
４年前から母とともに住み着いたここは、それなりに平和だ。
最近までは。
なんでこんな言い回しをするかって言うと……ごくごく最近まで、この街はある意味での戦場と化していたからだ。

魔王と死神のガチンコ勝負のせいでね……

巻き込まれないようにあの手この手で逃げ延びて、状況把握は曖昧だが……恐らくこの時期ならあの事件はもう終わっているはずだ。
とまあそんな感じで、俺は平和な時間を過ごしているわけで……っと。
こんなことを考えているうちに目的地に到着だ。
海鳴図書館。
品揃え豊富なこの場所は、格好の時間つぶしエリアだ。

「今日はなに読もうか……あれは読んだし……続きが気になるから次の巻を読もう」

そうして俺は、自動ドアを抜けて図書館内へ入っていった。
・　・　・　・

・
海鳴図書館は、この海鳴市における書庫とも（俺曰くだがな）言える量の本が置いてある。
子供が読む絵本から、大人が読むような難しい本。
参考書などや、なぜかのミリタリーノベルスやライトノベルなどの小説群もおいてる。
うん。この際なんで市の図書館にそんな物がおいてあるのかはスルーするとして……とりあえず俺は、館内を歩いて回り目的の本棚にたどり着いた。
館内は結構広いから大変だ……！

「えっと……あの話の続きはこれか。」

図書館に連なる本棚の一角ーーーーライトノベルなどが並ぶ本棚の本の中から一冊を取り出す。
手にとったラノベの表紙は、かなりきわどい格好の女の人がロボットの前で立っているというものだ。
小説の名前は一部ドイツ語。内容は、パラレルワールドにおけるある地球の１９８０年代の東ドイツでのお話だ。
ちなみにだが……本当だったら、小学三年生の子供が読めるような代物じゃない。
なんで読めるかって？そりゃあ……元は高校二年生だったからな。
おっと話がそれた。

「さて……」

そして、別の作品のも取り出して数冊のラノベを片手にその場所から歩き出す。
向かうは休憩所だ。
そうして休憩所へ向かい歩いていると……

「ん？」

見覚えのある、紫色の髪の毛が見えた。
後ろ姿、背格好は学校の同級生と同じだ。

「よっす。」

「ひゃわΣ！？」

俺がそう声をかけた瞬間、紫色の髪の女の子は、なんというか……
…予想通りの反応とともに、素っ頓狂な声をあげてくれた。

「れ、れれれレンくん！？」

「お、おう。」

動揺しっぱなしの女の子に、俺は若干たじろいでしまう。
だってなぁ？ここまで驚かれるとショックというか……

「あー……大丈夫か？」

一応聞く。すると、「あ、うん。大丈夫だよ。」という返事がすぐさま返ってきた。

「もう。急に声かけないでよ！」

眉根を寄せて非難の声を浴びせてくるのは、俺が通う小学校の同級生かつ同じクラスの月村すずかだ。
お嬢様然とした雰囲気にピッタリという風貌の月村。

まあ、今はそんなの関係なしに面白可愛い表情見せてくれてるんだがな。

「悪い悪い。いやぁ～な？」

「な？って……」

「知り合いに似た奴がいるんでびっくりだったんでな。だから声かけた。」

苦笑気味に俺は言う。すると、月村は機嫌を直してから「ん？レンくん何の本持ってるの？」と聞いてきた。

「あーこれか？あんましいい内容のものじゃない。」

そう言って何冊かもってる本を肩にのせる。

なんでのせたか？……特に意味はないぞ？

「そうなんだー……レンくんって、いつも難しそうな本ばっかり読んでるね？」

「あはは……まあ、そのおかげで漢字だけは大抵読めるし書けるようになったよ。」

また苦笑気味に答える俺。

そうして二、三言言葉を交わしたあと、一緒に歩き出した。

「月村はいつもこの図書館に来てるのか？」

「うん。今日はいないけど、アリサちゃんとかもたまに一緒にくる

よ？今日は、本を返しに来たの。」

「なるほど。」

歩きながら話しをしているうちに目的地であった休憩所へ到着。
俺は席へとつき、本を開く。

「えっと……私はお邪魔みたいだね。それじゃあ、また明日！」

「べつに邪魔じゃないんだが……わかった。また明日な。」

そう言葉を交わしたあと、すずかは俺と別れてどこかへ行った。

・・・・・・

時間が経つのは早い。
特に、自分が好きなことをしていると。

「そう思うこの頃だよ……」

俺は今、夜道を一人で歩いていた。
なんでかって？答えは簡単。すずかと別れたあと、ラノベを読み進めてるうちに閉館時間間近になってしまい、その時すでに外は暗くなっていたのだ。
そして、現在へいたる……。
ここにくる前もそうだったけど、俺ってぬけてるのかな……

「お腹減った……」

腕時計を見れば、現在時刻１８：３４。
十分に夕食の時間だ。どのみち義母（かあ）さんは帰ってきまい。
よって……

「夕食は外食にしよう！（キリッ」

そういうわけで、俺は外食すべく小学生が一人で食べても大丈夫な行きつけの屋台ラーメン屋を目指して走り出した。

・
・
・
・
・

外食はいいよね？
そんな事を思ったのは数秒前。

急な話だが、実は言うと俺は魔法が使える。
どこぞの魔王やら、死神さんやらがもってる魔法の杖も諸々の事情により所持している。

だからだろうか？

「……」

目の前には、ピンクの髪の毛をポニーテールにした綺麗なお姉さんが立っていた。
知り合いではない。だが……知識として知っているその顔を見て思ったことは一つ。
……ついに、俺の平和な日常ともおさらばか。

「……」

「……こんな夜遅くに出歩いているとは、中々に肝が据わっているな少年。」

「そりゃどうも。」

なんと凛々しい一言だろうね。嬉しいを通り越して逃げたくなってきたー（棒読み

「……悪いが、お前には少し痛い目にあってもらおう。我が主の為にもな。」

瞬間、そいつの俺に対する気配が敵意へ変わった。
光が放たれ、眼前に風が吹き荒れる。
そしてーーーーー光が晴れた先に、騎士がいた。

「ーーーーー怨みはない。だが、運が悪かった。」

西洋風の剣を片手に、近づいてくる。

「出会って早々それですか……！」

「すまない。だが、我らの使命のためーーーーー」

刹那。
視界から女の人が消えた時間はそう形容されるほど短かった。
眼前に、剣の柄を突き出してきた女の人が現れる。

「その身、”闇の書”の礎とさせてもらう。」

「……冗談……！」

常人ならば回避不能。
だが、自分の体は常人とは異なる。なればこそ、

「何……！？」

「……っ…」

回避は可能だった。
頬をなでる風。俺は体を後傾させ、そのまま後ろへ跳んだ。
そして地面へすれる足裏に制動をかけながら着地。
姿勢を戻して、俺は女の人と相対する。

「ほう……初撃をかわされるとは。気絶させてからのほうがいいと思ったが……本当に痛い目にあいたいと言うことか？」

「……そいつはごめん被りたい。」

〈ぷわっと！？ま、マスター！これは一体何事ですか！？わっつはぷん？〉

と、張り詰めた空間のなかに女の子の声が響き渡った。
おい。雰囲気ぶち壊しだろ。

「いいところでツッコミいれてくれたなミスト。」

俺はそう言って、首にぶら下げた”十字架（ロザリオ）”を手にとった。

「……状況は今、俺にとって嫌な方向へ流れてる。しかも、最悪の形でだ。」

「何を話している？」

俺が頭を抱えながらミストーーーーマイデバイス〈ミストシュヴェリア〉と話していると、元凶（女の人）が何やら聞いてきた。

まあ、その質問はスルーだが。

「……とりあえず、一縷の望みをかけて俺は戦うと決めた。」

……うん。正直言ってもういやです（涙

〈マスター……頑張れ！〉

「お前も頑張るんだよ！いくぞ！〈ミストシュヴェリア〉、セットアップ！」

〈バレたΣ！？オーライ！任せておっけー了解です！〉

「いいから早くしろ！？」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ，Ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　Ｕｐ！〉

その声とともに、俺の体が光につつまれた。

Ｓｉｄｅ蓮Ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ？？？

光が迸る。蒐集のための”獲物”と定めた少年からは、予想外の魔力がみなぎっていた。
最初の時は、大きな魔力を秘めていると踏んで試してみたが……

「……面白い。」

光が晴れると、そこには姿を変えた少年が立っていた。
藍色のジャケットに、腰部分と胸部に黒い甲冑を身につけている。
右手にはデバイスであろう槍。

「撃退させてもらう……！」

槍を構える少年。

「ほう……烈火の将たる私を相手に、生半可な攻撃は通用せんぞ？」

「いきなり襲ってきての台詞がそれですか……」

私も、再び剣を構える。

「いくぞ、〈ミストシュヴェリア〉！」

〈ＯＫ！Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ　Ｒｅｎ！〉

「参る……！」

そして、赤と青の光が激突した。

Ｓｉｄｅ？？？アウト

◆　◆　◆　◆　◆　◆

”ザァン！ザン！！”

剣と槍がぶつかりあう音が響き渡る。

「距離をとるぞ！これが初陣なんだ。長い時間付き合うわけにもいかない……！」

〈そうだね～〉

「〈アイシクルランサー〉、セット！」

藍色のジャケットを纏う少年ーーーーー蓮がそう言うと同時に、三角形の魔方陣が彼の足下に展開される。

そして、彼の周りにいくつもの”矢”が形成された。

攻撃方法や形状は、フェイト・テスタロッサのもつ〈フォトンランサー〉に似ている。

〈”Ｉｃｉｃｌｅ　ｌａｎｃｅｒ”，Ｓｅｔ！〉

「はあああああ！！」

「寄ってくるなよ……！ミスト！」

〈”Ｉｃｉｃｌｅ　ｌａｎｃｅｒ”，ｆｉｒｅ！！〉

〈ミストシュヴェリア〉がそう命じた瞬間、六の水槍（アクアランサー）が烈火の将と名乗った女性ーーーーーヴォルケンリッターが一人、シグナム目掛けて放たれた。

雄叫びをあげて突撃するシグナムは、向かいくる六つの槍を一刀のもと斬り捨てる。

「そいつは、想定内だ……！」

〈”Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｅｄｇｅ”，ｓｈｏｏｔ！〉

そう言うと同時に、蓮は槍を一閃。

水を纏う槍から、密度を高めた水で構成された刃ーーーーー〈クリスタルエッジ〉が放たれる。

「〈レヴァンテイン〉！！」

〈Ｊａ（はっ）！！〉

”ガシャン！”

シグナムがその手に持つ剣ーーーーー剣型インテリジェンスデバイス〈レヴァンテイン〉を呼び、〈レヴァンテイン〉は己が主に応える。

剣の刀身下部の装甲が上下し、薬莢が吐き出される。

次の瞬間、シグナムのもつ魔力が跳ね上がった。

「叩き斬れ！！」

〈Ｊａｗｏｈｌ！（了解！）〉

そして、炎を纏った魔剣が水の刃を切り裂く。

「んな……！？」

いとも簡単に切り裂かれた自身の攻撃と、それを切り裂いたシグナムの剣をみて驚愕の声をあげる蓮。

〈マスター！〉

「チィ……！」

〈くのぉ……！Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！〉

そのままの勢いでシグナムは蓮に迫り、そして剣を振り下ろした。

〈ミストシュヴェリア〉がすんでのところで障壁（プロテクション）を発動し、防ぐ。

「甘いな……！」

「くぅ……！」

踏ん張る地面にヒビが入り、斬撃を受けきれず障壁にもヒビが入る。

「……う、おおおお！！〈ミストシュヴェリア〉！カートリッジロード！！」

〈Ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ！　Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ

！〉

「何……！？」

「薙ぎ払え、〈アクアスパイラル〉！」

蓮の声に応じ、〈ミストシュヴェリア〉の槍と杖の接合部分が煙をたたせながら上下した。
シグナムのもつ〈レヴァンテイン〉と同じシステムーーーーーカートリッジシステムを発動させ、逆襲の一撃を障壁が破られると同時に叩き込む！

「はあああああ！！」

交錯する刃と刃。
すれ違い、お互いの距離が離れる。

お互いの一撃は、両者に浅いながらも傷を作っていた。

蓮には肩に切り傷を。
シグナムには頬に切り傷を。

「……はぁ……！はぁ……！」

荒い息を切らせ、蓮は冷や汗を流しながら安堵していた。
もしあの時、防御に徹していたならどうなっていたか？
もしあの時、反撃に転じたとして攻撃が失敗していたらどうなっていたか？
そう、嫌な未来をそうぞうしてしまうほどに、それほどに自分と相手との力量は離れ、蓮が放った今の一撃は紙一重であった。

〈マスター、大丈夫……？〉

「大丈夫じゃないな……よし。逃げる。」

蓮は、内心なぜ最初からそうしなかったのかを後悔しながら早々に決意した。

「〈ミストシュヴェリア〉、カートリッジロード！」

〈Ｃｏｍｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ！〉

「〈アイシクルランサー〉、乱れ撃て！」

その掛け声とともに、形成された一気に形成された２７もの水槍が一斉に放たれる。

”ドドドドドド！！”

「ふっ……だが、このような目くらましなど！」

「悪いがさっきみたいな奴じゃない！」

シグナムが殺到する〈アイシクルランサー〉をいくつか切り裂いた瞬間、それが弾けシグナムへ降りかかった。

「何……！？」

「俺の属性は、”水”とーーーーー」

降りかかった水が、一瞬にして凍りつく。

「ーーーーー”氷”だ。」

動きが止まるシグナム。

その一瞬の間に、蓮はその場から急速離脱した。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅシグナム

「逃したか……」

私は、身を拘束していた氷を砕いて自由になったところでそう言った。

先ほどの魔導士……未熟だが、筋はいい。

蒐集は失敗したが、次こそは必ず仕留めるとしよう。

我々と同じベルカ式の魔方陣と、完成度の高い”カートリッジシステム”。

あのようなまだ年若い少年がもつ”力”としてはこの温い時代では破格のモノか。

「ふふふ……再戦を期待するぞ、”レン”。」

戦闘の最中に一瞬だけ聞こえた少年の名を呼び、私はその場から立ち去った。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

物語はゆっくりと動き出す。

これは序章。物語への介入を拒んだ少年はしかし、狂った運命の歯車によって物語へ関わっていく。

異物を織り交ぜた、もう一つのおとぎ話。

結末は、果たしてどのようなものになるのか？

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｔｅｄ……

（推奨ＥＤ：水樹奈々／ＭＡＳＳＩＶＥ　ＷＡＮＤＥＲＳ）

プロローグ「始まりは、厄介ごとから」（後書き）

狼「……ここでちょっといい？」

アーチャー「なんだね？」

狼「これ考えるの、実は3週間以上かかったんだーw」

アーチャー「……確か、いくつも書いてようやくの一品がこれだったな。」

狼「うん。つっても、あんましできはよくないんだけどねー。本当のプロローグじゃないしねこれ……」

アーチャー「いいのが思いつかなかったのだろう？」

狼「……うん。ぶっちゃけるとそう。」

蓮「よ、ようやく逃れられた……」

狼「おお。これがこれはこの物語暫定主人公の蓮くんじゃないか。」

蓮「暫定じゃねえ！？ま、それはそうとしてこれを読んでくれた皆。作者に変わって謝っておく。すまない。」

狼「なぜに！？」

蓮「だってお前、あの文章わかりづらすぎるだろう？あと、俺の容姿はちゃんと決まってんのか……？」

狼「……さーて、次話執筆作業にとりかからないとなー。マブラヴのほうも更新アンド書き足し書き直ししなきゃだしなー（棒読み」

蓮「……アーチャー、後は頼んだ。」

アーチャー「ああ。では、セイバーの元へいくぞ。君は本当に痛い目を見なければわからんらしい。（連行」

狼「ええ！？（連行」

狼が連行された数分後、どこからか断末魔が聞こえてきたとさw

・

・

・

蓮「さてと……後書き長ったらしくなっちまったな……とりま、説明不足とか誤字とか文がおかしいとか色んな不備があると思うが、多めにみて読んでやってくれ。

あと、Ｆａｔｅのキャラであるアーチャーとかがでてるのは特に作品に関係ないからな。

んじゃ、次の話で会えたらあおうなー」

感想、意見、その他諸々受付中です！

第一話「新たな戦いの始まりなの！……に巻き込まれた！？」（前書き）

第一話投稿。

アニメ準拠なので、展開などは一部はしょったりとしますがほぼ同じです。

そこに主人公からんでいきますが……

ぶっちゃけ今回は第一話の再現なので、主人公ちょっとしかでません。

蓮「ええ！？」

ちなみに、最後はやっぱり一話の名シーンだよな！

ちょっちアレンジ追加！（２０１１／１１／１９　０８：１８）

では？ＧＯ！

第一話「新たな戦いの始まりなの！……に巻き込まれた！？」

「はぁ……！はぁ……！」

俺ーーーー桐谷　蓮は、息を切らしながら空を飛んでいた。

「これくらい……離れれば……大丈夫……だろ……！」

”あいつ”から十分に距離をとった事を確認してから地面へ着地する。

さっき襲撃を受けてから戦闘に突入しそこから逃走してからすでに十分。

流石に追いつけはしないだろう。

幸い、人気のないところでの戦闘だったので結界は張られていなかった。

結界張られてたら、逃げられたかわからんが……

「は……ぁ……ふぅ……」

息を整えながら震える肩を抑えて座り込む。

ＢＪを解除し、ミストも待機状態の”十字架（ロザリオ）”に。

「痛ぅ……！」

肩に痛みを覚え肩を見ると、右肩部分の服が赤くなっていた。

さっきやられた傷だ。

〈ひゃ～、それにしても酷い目にあったね～。大丈夫マスター？〉

そんなお気楽口調で話しかけてきたのはデバイスのミストだ。
口調こそアレだが、”彼女”は”彼女”なりの心配してくれてるのだろう。
だが……

「普段が普段だけに、お前にそう言われるとかえって不気味だな……それに他人事かよ……」

〈そりゃ戦うのはマスターだしね～ってなんかひどくない！？〉

「まぁ……心配してくれてありがとよ。」

軽口を交わしながら、俺は立ち上がる。
すでに時刻は１９：００をまわり、小さい子供が出歩いていい時間ではない。
幸い義母（かあ）さんが帰ってくることはないが……

「さて……帰るか。」

そんなことを呟きながら、俺は歩きだした。

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

第一話「新たな戦いの始まりなの！……に巻き込まれた！？」

ーーーーー１２月１日　ＡＭ０６：３５　海鳴市　桜台ーーーーー

冬になり、外は寒い季節。
桜台と呼ばれる場所に、珍しく一人の女の子が立っていた。
ここ最近、頻繁にここに足を運ぶようになった女の子の名前は、高町なのは。
彼女は、今修行中であった……！（深い意味はないｂｙ作者

Ｓｉｄｅなのは

「それじゃ、今朝の練習の仕上げ。シュートコントロールやってみるね？」

朝早く起きて、魔法の練習をする。
もう日課になったそれの、今日の練習の仕上げをするべく、私は一本のジュースの缶を右手に持ちながら”相棒”ーーーーーインテリジェンスデバイス〈レイジングハート〉にそう言った。

〈Ａｌｌ，ｒｉｇｈｔ．（わかりました）〉

レイジングハートは待機状態で私に答える。
よし。仕上げ、頑張るの！

「リリカルマジカル！福音たる輝き、この手に来たれ。導きの下、鳴り響け！」

魔法を行使する呪文を唱えようとすると、魔方陣が足下に浮かび上がった。
そして、呪文を唱え終えると同時に、缶を投げ上げる。
「〈ディバインシューター〉、シュート！」
人指し指に現れた一発のピンポン球台の大きさの球体が、そう命じると同時に放たれる。
そして、放たれた〈ディバインシューター〉は、投げ上げられた空き缶に命中した。
「コントロール……！」
念じる。
すると、私が放った〈ディバインシューター〉が向きを変えて再び缶に当たる。
一回
二回
三回
四回……
何度も何度も。
〈ディバインシューター〉は私の思い描く動きを忠実に再現して缶に体当たりを繰り返す。
〈ーーーー１８、１９、２０、２１〉

「アクセル！ふ……くぅ……！」
操作をさらに複雑に。
速く、かつ正確に缶へ〈ディバインシューター〉を命中させる。
何度も、何度も。
〈ーーー55、60、68〉
”…カン！…カン！…カン！”
〈ディバインシューター〉が命中する度に跳ね上がる空き缶。
もう少し……！
〈ーーーー98、100〉
「ふぅ……！ラスト！」
そして、人指し指を前に向けて叫んだ。
目の前に落ちて来た空き缶に、私の後ろからきた〈ディバインシューター〉が命中。
そのままゴミ箱のほうに飛んで行きーーーー”カン。カランコロン”。
「ああ～……」
落胆。
ゴミ箱に飛んで行った空き缶は、惜しいところでゴミ箱には入らず、
ゴミ箱の入り口の手前にかすりそのまま落ちてしまった。
足下の魔方陣が消える。と。

〈Ｄｏｎ'ｔ　ｍｉｎｄ，ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ．（良い出来ですよ、マスター）〉

そう、レイジングハートが褒めてくれた。

「なはは……ありがとうレイジングハート。」

苦笑気味に私はベンチにバックと一緒においてある待機状態のレイジングハートに言う。

「ふぅ……」

空き缶を拾ってゴミ箱に入れる。
どのくらいの出来かと聞いたら、レイジングハートは

〈ふむ……８０点くらいでしょう。〉

って言ってくれたの♪

・
・
・
・
・

私、高町なのはは、この海鳴市の小学校に通うごくごく普通の小学三年生！っていうのは最近まで。
春先に起こった不思議な出来事のおかげで、今は魔法少女をやってます♪

っとと・・・・それはそうと、今日からまた学校です！

制服に着替えて・・・・・・机の上においてあるＤＶＤを見る。
それは、ちょっと今は離れちゃってるけど、大切な”友達”のビデオメール。

「フェイトちゃん・・・・・元気にしてるかな？」

ふふ♪春先に起こった不思議な出来事で知り合った女の子ーーーーーフェイトちゃんの事を考えてちょっと嬉しくなります♪

「ふぅ・・・・・・・あ！朝ごはん！」

時間を見てから、急いで私は部屋からでた。

・
・
・
・
・

「おはよー！」

リビングに入り、私はみんなに挨拶をします。

「お。おはようなのは。」

と、お父さん。

「おはよー♪」

「おはよう」

と、お姉ちゃんとお母さん。

「おはようなのは。なのは宛に郵便が来てるよ。」

とお兄ちゃん。

「あ！ありがとーお兄ちゃん♪」

「またあの子からのビデオメールかい？」

お兄ちゃんにそう聞かれて、私は満面の笑みで「うん！」と答える。
またまた来ました！フェイトちゃんからのビデオメールです！
アルフさんとかユーノくん。もちろんフェイトちゃんとかも元気かな？？

「嬉しそうだね～なのは～。それにしても・・・・・ユーノがいなくなっちゃって私寂しいよ～」

お姉ちゃんが間延びした声でそんな事を言います。
実はまだ、みんなにユーノくんの正体を話していないんだよね・・・・にゃはは。
ユーノくん、ここで生活してる時はずっとフェレットだったから、
「本当の飼い主さんのところに帰った」っていう設定がまだ生きてるなの・・・・・・（苦笑

「にゃはは～・・・・・でも、またユーノくん家にくるかもだよ？
飼い主さんの事情とかで・・・・・・」

「本当！？やったぁ！またこれでユーノを可愛がれるよお母さん！」

「あらあら。ふふ♪そうね。お母さんも楽しみだわ♪」

おい。この人本当に既婚の人か？ｂｙ作者

ん？なんか聞こえたけどスルーなの。
なんだかんだで平和な一時。
そして今日も一日、リリカルマジカル頑張っていきます！

Ｓｉｄｅなのは Ｏｕｔ

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ蓮

朝。
私立聖洋大附属小学校・小学三年生たる俺は、自分のクラスの自分の机に突っ伏していた。

……さて、ここで一つ言いたいことがある。
昨日の夜は、色々と面倒なことに巻き込まれた。
そして、その影響で外食は失敗。寂しく家でカップラーメン（一風堂Ｖｅｒ）を食べる羽目になった。
……うん。あの時はもう……悲しくて涙がでたね。
そんなこんなで、面倒事のお陰で受けた肩の傷は一応応急処置を施し、昨日は疲れていたので寝た。

だって、”あの時”以来、久々の魔法行使だったんだもん。しかも、戦闘狂（バトルジャンキー）に襲われたんだもん（主に命に関わる）。

だからこそだ。
え？つまり何を言いたいかって……
「眠い・・・・・・・・・・・・・・・！」
「あんたは朝っぱらから何言ってるのよ全く・・・・・・・」
俺がそう嘆き悲しんでいると、すかさず、ツッコミが入ってきた。
声のした方へ顔をあげて視線を向けると、金髪の女の子ーーーーーー
クラスメイトの燃える（バーニング）美少女、アリサ・バニングスが立っていた。
「誰が燃える（バーニング）よ！？」
「あれ？声にでてた？」
「でてたわよ！（べしっ」
痛い！？くそう・・・・・・ただでさえ眠いのにバニングスの野郎に頭ぶたれた・・・・・・・。
「あ、アリサちゃん。レンくん眠そうだし、もうちょっと優しくしてあげた方が・・・・・・・」
と俺に若干のフォローを入れてくれるのは、先日、厄介ごとに巻き込まれる前に行った図書館で会った月村すずか。
「にゃはは。でも、レンくんが眠そうなのはいつものことじゃないかな？？」
苦笑気味にそういうのは、栗色の髪の毛をちょこんと左右でそれぞ

れリボンでまとめてツインテ（？）にしてる同じくクラスメイトの高町なのは。
意外と運動苦手なのが面白いところ。

「あー・・・・・うん。ひてーはできない。」

高町の言ったことはあながち間違いじゃないので俺はそう答えた。

・・・・・・・ああ。いつも通りの平和な朝だ・・・・・・！（昨日のことで色々平和な一時に内心感動中。
きっと昨日の出来事は、夢の中の出来事さ！

現実を見なさい。ｂｙ作者

・・・・・・・・・・なんか聞こえたけどスルーだな。
ただ、昨日の出来事は嘘でも何でもなく本当の出来事。
なにせ、制服で隠してはあるが右肩には包帯が巻いてありそれが本当だと物語っている。
あれ・・・・・・・？平凡を望んでいたはずの俺の日常終了・・・・・？もう俺の運命決まった・・・・・・！？

「ｏｈ・・・・・・・」

「またアンタは・・・・・・・なんに絶望してんのよ？」

「うるさい。なんでもない。」

「嘘ね。」

「エー？ナンデモアリマセンヨー？」

「・・・・・・・・・ふふふ・・・・・・馬鹿にしてるでしょ？（にっこり」

「なんでもありませんっしたぁ！！」

俺の「ｏｈ・・・・・・・」に反応したバニングスをからかったけど・・・・・・うん。

女の子に逆らっちゃだめだよね・・・・・・・（遠い目

「ま、いいわ。」

「あはは・・・・」

「にゃはは・・・・・・」

バニングスは鼻を鳴らしてそう言い、高町と月村は苦笑。

”がらがらがら”

ドアが開く音とともに、担任の先生が入ってきた。

ＳＨＲ・・・・じゃなくて、小学校だから朝の会か。

クラスメイトは皆席につく。

「おはようございます、皆さん？」

担任の笑顔とともに放たれた挨拶の言葉に、

『おはようございます先生！』

「おはよーございまーす。」

これまた皆（俺除いて）が元気に挨拶を返す。

「皆元気ですね。それでは、日直の子、号令を。」

それに合わせて今日の日直が「起立！気をつけ！礼！」と元気良く号令して朝の会が始まった。

最後に一言：結論、眠い。ｂｙ蓮

・

・　・

・　・　・

そんなこんなで、今日の学校生活も無事終わった。

俺？俺は、一時間目と二時間目は寝たよ（キリッ

だって、国語と社会が連続だったんだもん・・・・・・・・・・歴史はそれなりに得意だしー国語は感じゃん？（みんなは真似しちゃダメだよ？

と、とりあえず、学校が終わり放課後。

三人娘（高町、月村、バニングス）と帰るルートが違う俺は、一人帰路についていた。

夕暮れに染まった空を見上げてぽつりと一言。

「平和だ～・・・・・・」

おいそこ。へんな目で見るな。

もう、どっかの守護騎士に目をつけられて今日の夜も生き残れるか

わからんのだよ・・・・・・・・！

「そう考えたら・・・・・・・なんか憂鬱になってきた・・・・・・・・」

とぼとぼ。

はっ！ネガティブになっていた！

こ、こんな時はポジティブに物事を考えなきゃ！

とりあえず・・・・・・・・・・

「気晴らしにスパ〇ボＯＧの２を進める！」

そうと決まれば善は急げだ！！

Ｓｉｄｅ蓮Ｏｕｔ

◆　◆　◆　◆　◆

時間は経ち、時刻はもう夜遅くを回っている。

海鳴の街は暗闇に包まれーーーーーそして、どこか”違和感”に包まれていた。

街に、一人も人がいないのだ。

街並みは普段の”色”とは違い、異質な別のものになっている。

原因は、一つだった。

何者かによって展開された古代ベルカ式の封鎖結界。

そして、その中に閉じ込められた建物の一つの屋上に、一人の女の

子が立っていた。

高町なのは。

今日の蒐集の”目標（ターゲット）”とされた見習い魔導士。

「……どうなってるの、これ…？」

自身が置かれた状況に困惑するなのは。

その彼女めがけて、

〈Ｉｔ　ａｐｐｒｏａｃｈｅｓ　ａｔ　ａ　ｈｉｇｈ　ｓｐｅｅｄ．
Ｉｔ　ｃｏｍｅｓ．　Ｈｏｍｉｎｇ　ｂｕｌｌｅｔ！（対象、高速で接近中。来ます。誘導弾です！）〉

「・・・・・・・・・っ」

一発の鉄球が襲いかかった。

即座に発動、左手に展開した防御魔法でそれを防ぐ。

強烈な一撃に顔をしかめるなのは。

そこへ、

「デートリヒ……シュラアアアアク！！」

「くぅ・・・・・・・！」

赤い服を纏い、ハンマーを振り上げた少女が襲いかかった。

”ガン！！”

鈍い音とともに、なのはが咄嗟に展開したもう片方の障壁にハンマーが叩きつけられる。
強い衝撃はなのはの両足を地面にめり込ませ、ハンマーの一撃は、そのまま力任せになのはを吹き飛ばした。

「きゃあああ！！？」

建物の屋上から落下するなのは。

「くぅ・・・・・・！レイジングハート、お願い！」

傷を負った左手を抑えながら、”相棒”の名前を呼んだ。

〈Ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ，　ｓｅｔｕｐ！〉

それに応え、レイジングハートは輝き、なのはの体を桃色の光に包み込む。
赤い宝石が杖となり、なのはをＢＪ（バリアジャケット）が包み込んだ。
そして、桃色の光が輝きを増す……

◆　◆　◆　◆　◆　◆

Ｓｉｄｅ？？？

「……」

蒐集のために表的にした魔導士。
そいつを襲撃して吹っ飛ばしたまではよかった。

吹っ飛ばしたそいつから、大きな魔力が放たれる。

「……ちっ。アイゼン！」

〈Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ．（シュヴァルベフリーゲン。）〉

「うおりゃあああああ！」

あたしは手に持った鉄球を投げあげると、右手に持ったデバイスーーーーハンマー型デバイス〈グラーフアイゼン〉を叩きつけた。

衝撃とともに、鉄球による打撃攻撃〈シュヴァルベフリーゲン〉が放たれる。

標的のやつを包み込んでいた桃色の光に直撃して爆発を起こした。

ーーーーー爆炎の中から出る前にあいつを叩き潰す……！

”ズザアアアン！！”

「……っ！」

”ヒュン！”

でも、躱された。

ハンマーが煙を切り裂く直前に、そいつはその場からすぐ離れたんだ。

「いきなり襲いかかられる覚えはないんだけど……」

白い服を纏った、あたしと背格好は同じくらいの女。

「どこの娘（こ）！？」

そいつが、腑抜けた疑問を投げかけてきやがる。
まあいい。悪いが、問答無用なんだよこっちは。
あたしたちの、”目的”と”使命”のためにも……！

「一体なんでこんなことするの！？」

「……」

白いのの声を無視して、再び次の一手をーーーーー

「教えてくれなきゃ……わからないってばーーーー！」

そいつの叫び声に呼応して、背後から、二発の桃色の魔力弾が向かってきた。
一発は回避。
でも、もう一発はよけきれない。

「くぅ……！」

爆発。
ダメージはねえ。攻撃は受け流した。

「この野郎おおおお！！」

急激に距離を詰め、そこからの打撃。
でも、

〈Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ．〉

白いのの足から生えた桃色の羽が、そいつのデバイスの音声と同時に羽ばたきあたしの攻撃を回避する。

・・・・・・・・・・・・ちっ。一気に距離をとられた。

「……！」

直後に、白いののデバイスが変形。

槍のような形になり、その先に魔力が集まり始める。

「話をーーーー」

〈Ｄｉｖｉｎｅ〉

「な……！？」

ーーーー砲撃魔法・・・・・！

「聞いてってばぁ！！」

〈Ｂｕｓｔｅｒ！〉

その声とともに、あたしめがけて桃色の閃光が放たれた。

Ｓｉｄｅ？？？Ｏｕｔ

◆

◆

◆

◆

◆

◆

Ｓｉｄｅ蓮

……。まさかね。

「今日がその日だったとは……」

景色が一変した街の中、封鎖結界の中に閉じ込められてしまった俺は、事が終わるまで建物の影に身を潜めていた。
戦っているのはおそらく高町と、赤い方はヴォルケンなんたらの一人、ヴィータだろう。

「このままじゃ、あいつがピンチになるんだよな……」

二人がそれぞれの攻撃を放ち、ぶつかる。
ヴィータのハンマー攻撃をよけて、ディバインシューター。
さらなるヴィータの追撃を回避した高町は、距離をとって砲撃魔法〈ディバインバスター〉を撃つ。

”ドオオオン！”

放たれた砲撃はヴィータをかすり、頭に被せていた帽子を吹っ飛ばした。
ああ……あそこでキレるんだな。

『〈グラーフアイゼン〉！！カートリッジロード！！』

聞こえてきた声はびヴィータのものだ。
肉眼で確認できたヴィータのデバイス〈グラーフアイゼン〉の形状が変化し、片側がスラスター、片側がの先端が鋭利なものになる。

「まずい……！」

『ラケーテン……ハンマアアアアアアア！！』

『きゃあああああああ！！』

そして次の瞬間、回転しそのままの勢いで突進をかける技〈ラケーテンハンマー〉を受けたなのはが、プロテクションを破られそのまま吹っ飛ばされた。

ＳｉｄｅＣｈａｎｇｅ

Ｓｉｄｅなのは

「げほっげほっ・・・・！」

吹っ飛ばされた影響で、息が詰まる。

さっきの一撃で、私はビルに吹っ飛ばされていた。

傷ついた〈レイジングハート〉を肩に抱きながら息を整える。

そこへ、

「・・・・・・・っ！！」

さっきの赤い女の子が突撃してきた。

形が変わったハンマーを回転させながら、同じ攻撃を私に放つ。

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！〉

ノイズ混じりの声で、〈レイジングハート〉がプロテクションを張った。

「くぅ・・・・・・！」

でも、傷ついた状態で展開されたプロテクションは徐々にヒビが入っていく。

「アイゼン！ぶち抜けええええ！！」

〈Ｊａｗｏｈｌ！！（了解！！）〉

そして、突き破られた。

女の子のハンマーの尖った先端部分が私のＢＪの上着を砕く。

「きゃあああああ！！」

衝撃。

女の子の一撃をほぼまともに受けた私は、後ろに吹っ飛ばされてーーーーー

「……つぅ……あぁ……！」

衝突音。それとともに身体中を痛みが襲う。

「（痛い、けど・・・・・！）」

立ち上がろうとする。

ーーーーあれ・・・・・・？

でも、力が入らなかった。

視界が霞む。

ああ……私、負けたのかな……

「……」

足音をたてて、さっき私を吹き飛ばした女の子が近づいてくる。

〈レイジングハート〉も傷ついて……あはは、私ダメだなぁ……。

「……はぁ……はぁ……！」

息遣いが荒い。

震える手で〈レイジングハート〉をもちあげて、女の子に向けた。

でも、もうこの状況を打開する力がでない。

ーーーーもう、終わりなの？

頭に、諦めにも似た感情が渦巻いた。

……いやだ……！まだ、フェイトちゃんとも再会できてない……！

ユーノくんとも、クロノくんとも、エイミィさんとも、アルフさんとも、リンディさんとも……！

だから、まだ……！

「……終わりだ。」

非情な一言。

女の子はそう言いながら、ハンマーを振り上げる

それが振り下ろされてーーーーーーーーーーーーー

”ガシャン！”

「……え？」

鈍い音。

女の子のトドメはいつまでも私に届かず、霞む視界の向こうに、

「……よかった……。間に合った、みたいだな……！」

聞き慣れた声と、青い背中が見えた。

ＳｉｄｅＣｈａｎｇｅ

Ｓｉｄｅ蓮

「ヒーローは、ガラじゃねえってのに……！」
厄介ごとってのは大嫌いだ。
自分のやろうとしてることは、今の自分の気持ちと大きく矛盾してる。
「ーーーーミスト！」
〈お任せあれ！Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔｕｐ！〉
青い光が自分を包み、〈ミストシュヴェリア〉とＢＪが纏われる。
顔を隠すためにヘルムを装着。
そして、
「……っ！」
俺はその場から跳躍し高町のもとへ急いだ。
ビルの破壊された場所から赤い背中が見える。
「……っ！うおおおお！！」
”ガシャン！”
「なに……！」
「あ……」
ーーーーー間に合った。

振り下ろされる〈グラーフアイゼン〉から高町を庇う様に割り込んで攻撃を阻止。
ギリギリのタイミングだった。
”ギリギリリ……！”
「く……！」
押されそうになるのを堪えて、押し戻す。
「……よかった．．．．．。間に合った、みたいだな……！」
安堵した俺は、そう今の気持ちを口にした。
「てめえ……！」
ヴィータが俺の乱入に苛ついた声を漏らす。
そこへ、
「はぁ！」
ヴィータ後ろーーーーー背後からの攻撃。
黒い影が、気合の一声とともにヴィータへ攻撃を叩き込む。
「ちぃ……！」
ヴィータが舌打ちをしながらその攻撃を回避。
特徴的な黒マントが視界に映り込む。
それは心強い”仲間”ーーーーー高町なのはの大切な”友”、フェ

イト・テスタロッサの来援。
そして、さらにもう一人。
「ごめんなのは、遅くなった。」
背後から声が聞こえ振り返る。
倒れた高町の横に、薄茶色のマントに黄緑色の服装の少年ーーーーーユーノ・スクライアがいた。
「ユーノ、くん……？」
か細い声で高町が言うと、ユーノは笑みを返す。
「そこの君もありがとう。なのはを助けてくれて。」
そして、こちらを見てから、ユーノは俺へ感謝の言葉を贈った。
俺は「ああ。」とだけ答え、〈ミストシュヴェリア〉を構える。
フェイトもまた俺の横に立ち、黒いデバイス〈バルディッシュ〉を構えた。
〈Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ.〉
〈バルディッシュ〉の先端部が展開し、金色の鎌が展開される。
「チッ……仲間か……！」
こちらを睨みつけてくるヴィータがこちらへ問う。
その問いに、俺とフェイトは迷いなくこう答えた。

「「ーーーーー友達だ。」」

と。

すれ違う思い。
それらがぶつかり合う戦いが、この夜、始まったーーーーーー

〈ＥＤ・ＢＧＭ：金の閃光（リリカルなのはＡ' ｓ　ＳＯＵＮＤ ＴＲＡＣＫ）〉より〉

第一話「新たな戦いの始まりなの！……に巻き込まれた！？」（後書き）

狼「はい！というわけで第一話をお送りいたしました！」

蓮「……なんか、ひねりがない。」

狼「うるさい！僕だって……そのへんは自覚しているんだ……！」

蓮「えー。うっそだー」

狼「さてと……暫定主人公はスルーして、第一話どうだったでしょう？ま、といっても前書きの通りアニメのほぼ再現なんでw（出来てない可能性大ｗｗ）」

なのは「にゃはは……私は結構序盤から酷い目にあっちゃうね。」

狼「……ごめんね高町さん……。魔王ともあろうお方にあんな酷い仕打ちを。」

なのは「Σ！？ち、ちょっとちょっと！今の一言聞き捨てならないの！魔王ってなに！？」

蓮「うーん……しろいあくまのことかなー（棒読み」

なのは「……白いのって、私のＢＪも白だよね……」

狼「そのへんは気にするなー。ではでは、次回は蓮の本領発揮（笑）！アンドダンディな青い人と我らが姉御ラミア……じゃなくてシグナムさん登場！」

蓮「次回、第二話「戦いの嵐再び。そして、魔法少年ただいま参上！」……ってタイトルおかしいだろ！？」

狼「次回もお楽しみに～」

なのは「……うぅ……魔王じゃないもん……」

感想、意見、その他諸々お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5420y/

魔法少女リリカルなのはA's ～偽りの魔導士～

2011年11月19日22時09分発行